『トクシマ・アンツァイガー』

第 18 号　　徳島　1915 年 8 月 1 日

ルーマニア（1）

ドイツの新聞でも東アジアの新聞でも再三論究されているテーマは、ルーマニアはどうするのか、中立にとどまるのか、それとも武器を取るならどちらの側に加わるのか、ということである。

この問いに答えるのは、われわれにとってもやはりむずかしく、これについての推測を表明しようとも思っていない。ただわれわれは、状況をよりよく理解するために、以下のことを明らかにしてみたい。それは、いずれかの側にルーマニアが仮に手を貸したとして、その見返りに提供される領土がこの国にいかなる意味を持つか、ということである。

今日のルーマニア王国の領土は 1861 年までトルコに属し、1878 年までなおもトルコの宗主権のもとにあった。この国は、ロシアに味方して戦ったクリミア戦争［1853-56］ののち、ロシアに強いられて、住民の大部分

がルーマニア系であるベッサラビアを割譲しなければならなかった。この地域は、以前はロシアに属していたが、1861 年にルーマニアのものとなっていたものである。

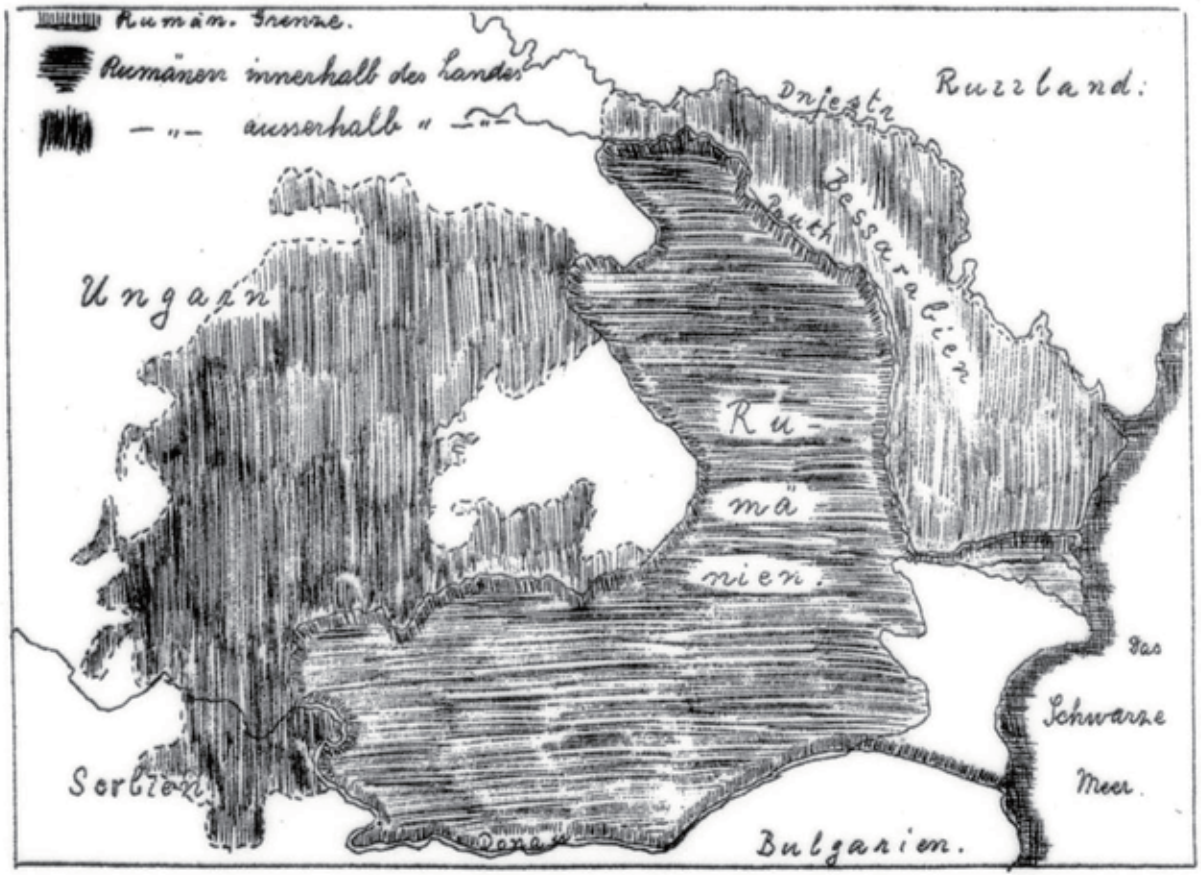
王国の現在の面積は 129,947 平方キロメートルで、これは南ドイツ、つまりバイエルン、ヴュルテンベルク、バーデン、エルザス・ロートリンゲン［アルザス・ロレーヌ］を合わせたのとほぼ同じであり、人口は 750 万人である。今日のルーマニア人は、かつてローマ人に征服され同化されたダキア人の子孫であり、彼らは今なおスラヴ人とハンガリー人に挟まれてロマン語の孤立言語圏を形成している。王国とベッサラビアに住むルーマニア人は、ほとんど例外なくギリシア正教を奉じているが、ハンガリーのルーマニア人は、その半ばが東方帰一教会[1]に属している。

しかし、すべてのルーマニア人が、ルーマニアの王冠のもとに統合されているわけではない。この民族の比較的多くの人々が別の国々に居住しており、ハプスブルクの王冠のもとにいる住民だけでも 325 万 5 千人いて、特にジーベンビュルゲンとブコヴィナに多い。ロシアの支配下には 125 万のルーマニア人がいて、彼らはベッサラビア（ドニエプル川とプルート川のあいだ）に住んでいる。それゆえ、自分たちの国民国家に統合されているのは、民族全体のようやく 8 分の 5 にしかならない。ルーマニア人は、その王国の中では他民族がわずかしか混入していないが、ロシア帝国やハプスブルク帝国の上述の領土においては、かろうじて多数民族であるにすぎない。例えばジーベンビュルゲンもまた、その中に比較的大きなマジャール語やドイツ語の地域を含んでいるのである。

ところで、バルカン半島の長引く動乱は、自分たちの民族同胞を政治的に統合しようというバルカン半島諸国家の志向にこそその原因がある。この志向において、今日のルーマニアは特別な立場にある。自国の民族の同胞が、これほど多く他国の支配下に置かれている国はないからである。

ルーマニアでは、この世界大戦を利用して、現在国外に居住しているで

1　東邦正教会に属しながら、カトリック教会とのかかわりを保っている諸教会


Rumän. Grenze.
Rumänen innerhalb des Landes
— „ — ausserhalb „ — „ —
Russland.
Dnjestr
Bessarabien
Pruth
Ungarn
Ru-
mä-
nien.
Das
Schwarze
Meer.
Serbien
Donau
Bulgarien.

きるかぎり多くの民族同胞を民族の核と合体させたいという願望が支配的であるが、これも当然のことである。これらの同胞は、参戦国のいずれの側にも属しているわけだが、このことから、どちら側につくべきかという判断がルーマニアには困難に感じられているということが説明できる。どんなに巧妙に立ち回っても、あるいは軍事的介入が成功しても、両方の側の領土を勝ち取るのは望み薄であろう。

つづく

日本の歴史（16）

幸運なことに、天皇に攘夷政策の危険性を納得させることには成功した。将軍の第一の敵である長門の大名は追放され、彼の信奉者たちは逃亡しなければならなかった。天皇は再び将軍の軍事力のもとに入り、将軍の諸部隊に都と宮城の警備を任せた。天皇はまた、彼の認可なしに結ばれた列強との通商条約を追認した。

追放された長門の大名の臣下たちは、1864 年に京都に攻め上ったが、撃退された。しかし将軍の軍隊は、翌々年に長門の大名を決定的に打ち負かすことはできなかった。これによって将軍の威信はひどく揺らぎ、尊皇派の者たちから、幕府を倒せという声がさらに高まった。将軍の死と、相次いで起こった天皇の死は、政治的緊張を高めることになった (1866 年)。新しい将軍徳川慶喜は、自国の危機的状況、つまり国内では目前に迫った内戦を、国外では列強との未解決の関係を見通した。国家を維持するためには、内戦を避けなければならなかった。それゆえ彼は、進んで将軍の位を棄て、それまで持っていた権力を天皇に返した (1867 年)。この一歩に続いたのは、国家体制の変革であった。天皇は昔のように、国家権力の唯一の所有者となった。官僚団が新たに組織されたが、従来の幕府の役人たちは誰も職を与えられず、尊皇派の者だけが任命された。慶喜とその信奉

者たちは、これを大きな侮辱と感じた。慶喜自身は平和を望んでいたが、結局流されるままに、尊皇派を滅ぼそうと軍を大阪から都へと進めた。彼は伏見付近で撃退された。慶喜はそれから大阪に戻り、そこで軍を解散した。彼自身は天皇に服従した。しかし、忠誠であり続けた将軍の家来たち、すなわち自称「彰義隊」は、なおも頑強に抵抗した。会津 (現在の若松) の城と五稜郭 (函館近郊) が占領されて、ようやく彼らの勢力は打ち破られ、屈服しなければならなかった (1869 年)。天皇の絶対的な権力を完全に回復するのにもうそれ以上の障害はなかった。270 人以上の大名がいて、彼らは天皇の主権だけを認めたが、その領国の中では統治権をみずからふるい、配下の武士軍を保持していた。大臣たちの指示によって、まず長門、薩摩、土佐、肥前の大名たちが進んで独立を放棄した。他の大名たちも徐々に彼らに続いた。1869 年の勅令によってそれぞれの大名の領主権は廃止され、天皇に委ねられた。大名たちは知事や郡長のような職に任命されたが、二年後、彼らはこれらの職を解任され、紙幣による金銭的補償で話をつけられた。武士軍も同様に解散させられ、武士は金銭支給で妥協させられた。大名と武士のために、全体で約 1 億 7,390 万円が補償として支払われた。その他になお、大名の果たすべき責務のために約 3,480 万円が支払われた。

つづく

包囲された青島から（2）

猛攻の後の砲台を訪れた者は、撃ち込まれた砲弾の恐ろしい威力に驚く。そこではあたりに家ほどの穴がいくつも開いていて、鋼鉄製の掩蔽は撃ち破られ、砲弾による破口の縁では金属が粥のように溶けている。しかし、そのような 6 ツェントナーの重さの榴弾が、砲座にいる砲兵たちのまん中に降ってきたところでは、現代の兵器のすさまじい破壊力に対する抑えが

たい驚愕に襲われる。さらに噂では、日本軍はクルップ工場製の最新の砲を持っていたのに、われわれの砲は一部旧式のものであったし、われわれの 40 門に対峙していたのは日本軍の 300 門以上で、ときには非常に大きい口径のものもあった。われわれが持っていたのは 28cm 砲だったが、敵が轟音を響かせていたのは 30.5cm 砲だった。だから、5,000 人足らずのドイツ人が 7 倍の優勢な敵に示した粘り強い抵抗には、驚かないではいられない。―

11 月 4 日の朝、夜の砲撃がやんだとき、私は電話に呼び出された。砲弾が達する限界にある海岸沿いの高等学校で、ひとりの負傷者が私に会いたがっているというのである。私は、今こそ気をしっかり持つときだと思った。それはわれわれの信徒のひとりかもしれない。心の声が私に言った。「おまえのゲルハルトなのだ」。

私は祈りながら、ぞっとするほど荒れ果て、破壊された静かな通りを歩いて行った。地下室の穴から、中国人たちが困惑した顔をして這い出てきた。ジュネーヴの旗［赤十字旗］を掲げ、蒼ざめた負傷者を乗せた自動車が、私のそばを疾駆していった。

広い部屋部屋で私を呼んだ者を尋ね歩いた。人々は同情の目で私を見た。ひとりの看護婦が、負傷者用の病室にされていた教室に私を導いた。そうだ、そこに私の哀れな息子が横たわっていたのだ。蒼白になり、頬は落ちくぼみ、両目には死の相が浮かんでいた。「パパ、来てくれたんだね」と彼は苦しそうに言った。「したたかやられたみたいだよ。」私は、氷のように冷たく汗ばんだ彼の額をなでてやり、その口にキスをした。「神はいっさいを正しくなしたまうだろう。わが子よ」彼はかすかにうなずいた。牧師の息子である軍医少佐の P 博士が入ってきて、心を深く動かされた様子で私の手を握った。「まず申し上げますが、あなたのご子息にはもうほとんど望みはありません。銃弾が背中を貫通し、内臓が引き裂かれているのです。」

そこで私はあの子の枕元に座った。彼はほとんど意識がなかったが、そ

れからまた目を開け、一言二言話し、それからまた眠りに落ちた。私は彼とともに、古くからの臨終の聖句を唱えた。「キリストの血と正義、それが私の飾りであり晴れ着である。」―「おまえはこの結びの句も知っているかい。」―彼はうなずき、ゆっくりと先を続けた。「私が天に召されたら、それをもって神の前に立ち続けたい。」私はゆっくりと詩編第 23 を唱えた。「今や死の影の谷へと歩んでいった。言葉という神の棒と神の杖を手に持つ者はさいわいである。」「外にいるのはとてもつらかったよ、パパ」と息子が言った。「恐ろしいほどつらかった。」―彼の口から、ゆっくりと言葉が出てきた。―「眠れないのはなんという苦しみだろう。―6，7，8，9 日ものあいだ。前哨に立ち、堡塁の装甲室に横たわると、昼も夜もセメントの壁に榴弾がとどろく。頭が刺すように痛むばかりで、ぼくらは皆、眠りたくてしようがなかったんだ。」彼の声はとぎれとぎれだった。看護婦が入ってきた。私は夕べの祈りを、彼の先導となって唱えた。これは彼が子供の時に好んで祈っていたものだ。

神の愛というものには
終わりもかぎりもない。
だから、父よ、あなたに
子として両手を差し伸べる。
どうか私に恩寵をください。
私の力のかぎりあなたを
昼も夜もいだくために。
このあたたかい命の中で。
そうすればこのときから
あなたを永遠に讃え、愛する。

つづく

収容所生活より

この２週間は、われわれがここで過ごした中で一番暑い日々だった。毎日毎日太陽が容赦なく照りつけ、夕べに日が沈んで少し涼しくなるかと期待していると、蚊が出てきてこの楽しみを割り引こうとする。こんな具合の夏の「楽しみ」がもう峠を越えていて、８月が７月よりも気温が何度か高くなるということがなかったらいいのだが。

残念ながら陸軍省は、われわれが戸外で水浴びする許可を出してくれなかったので、この暑さは特に不快に感じられる。というのも、収容所の風呂は今のところ夜 10 時まで使ってよいとしても、それは水泳の代わりにはならないからだ。川岸の水浴のための場所に張られることになっていたテントは今、バラックと本館の間に設置されており、少なくとも戸外に休憩のための陰を提供している。

最近はサッカーの試合もまったくお休みだ。とりわけ猛暑のために。しかしもうひとつの理由は、われわれが信号山[2]の麓の広場を整備するのを、市議会が許可したがらないということだ。８月、つまり学校の休みの時期には中学校の運動場を自由に使えるが、この広場はわれわれの収容所のすぐ近くにあるというそれだけの理由で、すでにもっと好都合なのだ。

われわれのオーケストラは、新しい曲の練習に熱心に取り組んでいるが、これからは定期的に、日曜午後の野外演奏会でわれわれを喜ばせてくれる予定だ。過去二回の日曜演奏会はすでに大喝采を博した。

2　信号山は徳島市の城山のこと。捕虜たちは青島にあった山にちなんでこう名付けた。

1915 年 6 月 16 日、H. ホルトカンプ撮影

今日のプログラムは以下のとおり

1．『ラデツキー行進曲』
2．バレエ曲『人形の妖精』より「大幻想曲」　J. バイアー
3．『ニ長調組曲』より「アリア」
ソロ・ヴァイオリンとオーケストラ
4．「アンナ、いったいどうしたの」　L. ファル
オペレッタ『アウグスティン』の動機によるワルツ
5．『３０年戦争時代のフィンランド騎兵行進曲』

今回は 5 時には開演である。これらの曲目はとても期待できる。『人形の妖精』からの「大幻想曲」や、バッハのヴァイオリン独奏曲が入っているからだ。

チェス・コーナー

（駒の略語　K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン）

第 29 問解答

1. Dh4 - h1　　任意の手

2. D か L で詰み

第 30 問解答

1. D g8 - d5+　　Kc6 x d5

2. Ka4 - b5　　e7 - e6

3. Lc8 - b7 詰み

1. . . . .　　Kc6 x c7 (b6)

2. Dd5 - b7 +　　Kc7 - d8 (b6 - c5)

3. Db7 - d7 (b5) 詰み

第 29 問の正解者は、Jos. ヴェーバー、H. ローデ。

H. ローデへ：寄せられた回答は、おそらく誤植のためはずれたのだろう。第 30 問への貴兄の回答は、黒の応手がキング c5-c6 となっているが、キングは c6 にいる。

第 31 問

白：Ka2, Db5, Td1, g5, La7, b1, Sb6, c3, Ba 4, e4, e5, e6, g2, g3.

黒：Kd4, Tc2, Lc1, Sd2, f5, Ba5, b2, c7, f4, f6.

２手詰め

第 32 問

白：Kb2, Db6, Sd1, Ba5, b4

黒：Kc4, Tc5, Ba6, c6.

３手詰め。

天神祭

この前の日曜日の夕べ、川べりにあるわれわれの収容所からきらびやかな光景を観察することができた。日本人が、いわゆる天神祭を、学問と学校の神のために祝ったのである。暗くなると、長い列をなした船にぎっし

り乗り込んだ群衆が川を下ってきた。それらの小船はすべて色彩豊かな提灯で飾られており、ほとんどの船からは日本の楽器が「好ましい調べ」を発し、それに合わせて歌声と手拍子が上がっていた。特に風変わりだったのは、大きな篝火の焚かれている幾艘かの小船で、篝火はときおり油を注がれてぱっと明るく燃え上がるのだった。祭りの最高潮は、向こう岸から打ち上げられたとてもきれいな花火だった。

これらすべてが、まことに日本的な情景だった。川と岸辺の家々には多彩な提灯が点々と配され、色とりどりの明るい星が夜の空に上がってゆき、両岸にはぎっしりと見物人がいて、どこもかしこも音楽と歌と笑いがあふれている。そしてこれは、収容所生活の単調さの中にいるわれわれにとっては歓迎すべき気散じであった。

「エムデン」上陸隊体験記（４）

以下は『ベルリーナー・ターゲブラット』紙からの引用の第二部である。

ヘジャズ鉄道での「エムデン」キャラバンとの出会い
「ドイツのために」
エル・ウーラ　ダマスクス経由　５月７日

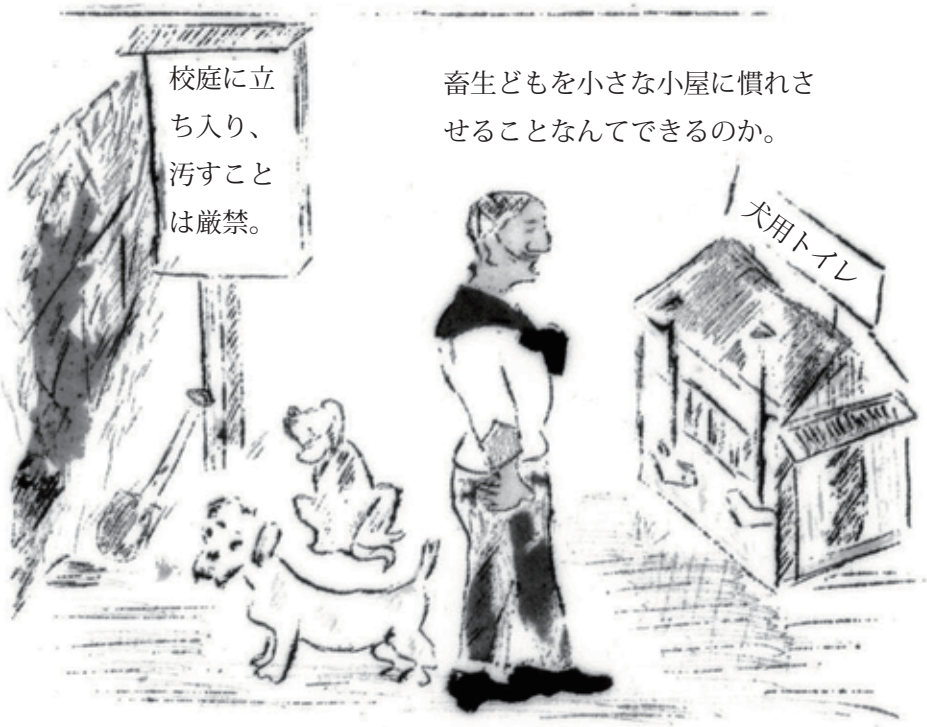
「エムデン」キャラバン隊は、今晩ここに着いた。すでに報告したように、ミュッケ大尉が一足先だった。突然アラビア人たちが飛び込んできて「彼らがやってきたぞ」と言ったとき、われわれはまだ座って待っていた。谷筋のある山の方から、小さなキャラバンが降りてきていた。私は彼らの方に向かって走った。そのときもう背の高い金髪の男が降りて来ていて、私が歓迎の意を表すると、笑った。彼は、完璧な熱帯服を着て無精ひげを生やし、この上なく青い船乗りの目をして、白いラクダのかたわらに立っていた。「入浴ですか、ライン・ワインですか」というのが私の最初の問いだった。「ライン・ワインです」と、きっぱりした答。それからわれわれは駅長

室に座り、彼は遠慮なく語り始めた。それは文字通り、水路と陸路を行く冒険譚である。その間彼は、「鉄十字章をもらったのかな」と言いながら手紙を開封し、新聞を見つけた。それは彼に、第一級鉄十字章とバイエルン勲章、ザクセン勲章の授与を次々に知らせるものだった。彼は笑い、赤くなり、プレゼントをもらった子供のように喜んだ。「ちょっともらいすぎだね」と彼は叫んだ。「でも一番うれしいのは、ザクセンのヨハネ勲章だ。父も持っているからね。」その間に、ミュラー艦長の運命や、カルパート山脈やダーダネルス海峡についての質問、そしてまた「エムデンとアエシャ」についてのきれぎれの報告が挟まった。そこに突然、キャラバンの到着を告げる報が入った。「部下たちを迎えないと」と彼は言い、われわれは大きなキャラバンに近づいて行った。先頭にトルコの旗を立てた 30 人のベドウィンがやってきて、次にいろんな風体の男たちが続く。そこには、ラクダに乗ってトルコ帽やターバンをかぶって変装した金髪の気のよいドイツの水兵がいて、あいだに色黒でメランコリックなまなざしのアラブ人たちが混じっている。「おまえたち」と大尉は呼びかけた。「全員鉄十字章だぞ。ギュスリング、君はバイエルン勲章もだ。」「やったぞ」という声が、赤く平坦な砂漠に響き渡る。ドイツの国旗が掲げられた。到着した人々との握手が続く。「おまえら、ここは天国だぞ。シャンパンの川が流れてる。それにこれを見ろ、本物の線路だ。」「いつ出発の予定かね」と、トルコの少佐が尋ねる。「3 時間後に。できるだけ早く夜通しで。」彼は、両親に到着を知らせるよりも早く、敵前で新しい命令をもらいたいという依頼を、電信で送ってもらっていた。これほどの名声を得ていながら、全 50 名の「エムデン」乗組員のような飾り気のなさを、私は一度も見たことがない。「ここに新聞はありますか。」「山ほどあるよ。」「ドイツはどうなってますか」と、ブロンドの人々の中から若々しい声が尋ねる。「ドイツは？」と尋ねる声が、アラビアの砂漠の方からも聞こえる。旅の途中で戦死した人々の名前を聞いたとき、「ドイツのために」と私は思った。横になって沈黙している疲れ切った人々の表情も、「ドイツのために」と語っている。

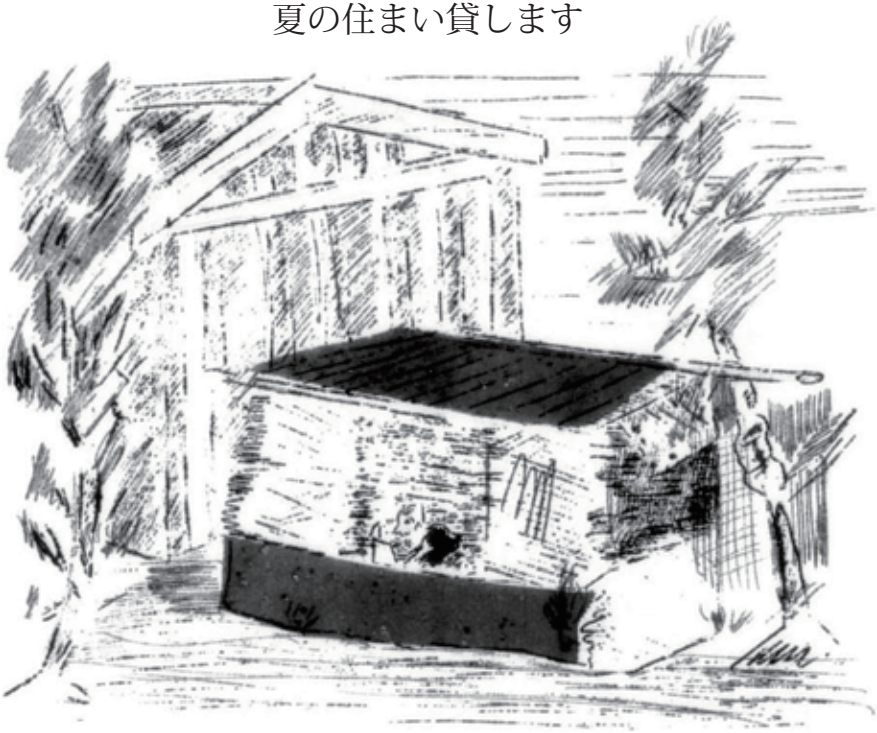
つづく

「トクシマ・アンツァイガー」18号（1915年8月1日）ユーモア付録

ああ、この犬ども！



夏の住まい貸します

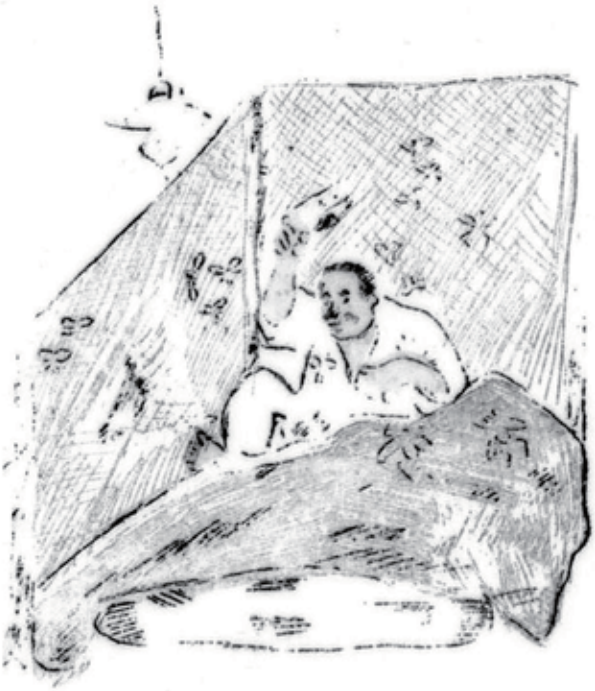


日差しはきつく、空気は熱い。
風もそよがず、神が憐れむほどだ。
それゆえ思い切ってキャンプを建て
司令本部と名付けた。
この手始めは賛意を得、
続いてレースクラブができ、
第三に消防ポンプ小屋の隣に
今度は愛のあずまやが完成した。
彼らの小屋（「上を」見よ）がはじめて
中庭に威厳と美と光輝を添える。

おそらくいずれは投機と
土地争いがおこるのだろう。

致命的な穴

カールは思う。ああうれしいな。
9時にもうベッドに入れるなんて。
一日の労苦とやっかい事のあと、
柔らかい床で休めるのは素敵だ。
賢明な配慮をおさおさ怠らず、
ガーゼで作った蚊帳を張った。
こうしておけば、夜煩わされずに
休むことができると考えたのだ。
だが、とんだ災難になった。
へやの明かりが消えるとすぐに、
辺りでぶんぶん音がし、ぞっとする。
頭に来てスリッパを振り回すが、
これでは休むどころじゃない。
一匹やっつけたかと思うと
もう一匹に刺され、別のやつにも。
罵ってもどなっても何にもならぬ。
さて、一晩中こんな具合が続き、
寝もやらず目は覚めたままだった。



朝になって、おだやかな日の
ひかりが窓からさしてくる。
そこでちょっと調べてみて
ようやくわけがわかったのだ。
蚊帳に穴があり、まさしくそれが
この睡眠妨害の原因だった。